岩魚

蔵原伸二郎

青空文庫

岩魚

——宋青磁浮紋双魚鉢——

五月のあかるい昼さがり
あまりに生の時間が重いので
私はひとり青磁の鉢を見ている
空いろの底に
二匹の岩魚が見えたりかくれたり

すぎる風に水がゆれると
岩魚の背もかすかに紅いろに光る
また　水底をよぎる遠い宋時代の雲
ながい時間のかげりをひいて
愁いの淵に岩魚は　ねむり
時に目を醒まして　はねると
いつのまにか蒼天をおよいでいる

鮭

白い皿の上の
鮭の切身
午前九時の青い太陽の
投影する北国の水の中
おいつめられたあいつが
きゆうといつて息たえた時
あいつの鱗は全部虹色に光つた

午前九時になると
いつでも　あいつの亡霊が
白い皿の海を
いつたりきたりする

すずめ

ながい間
雀は小さい卵をあたためていた
熱つぽい胸毛をひやすために
初夏の夕暮れに飛びたつた
岸辺の
青い風のふいている竹藪の梢にとまり
風にゆれながら
しばらくは羽毛をくしけずり
羽虫をふるい落した
それから　きりつと威厳をつくつて
菫いろに暮れてゆく山脈をながめ
遠くまで光る川をながめ

うす紅いろにかがやく雲をながめ
それから　首をかしげて
卵の中で鳴いているひよこたちの
かすかな声をきいていた

落日

小綬鶏は人道をよけて通る
ひよこをおおぜいひきつれ
ひくい声でしかりながら
ばらばらに散開しておおいそぎで通る

向うに深い竹やぶがある
その中の
夕日のゆれる陽だまりで
小綬鶏たちはたがいに呼びあつてかたまる
ぽとつと　ひとつ桐の花が落ちてくる

やがて日がしずみかかる
何百本とある青い竹の幹の一つ一つに
ちかちかと黄いろい灯がともつて消える

西瓜畑

昨日まで
ごろごろころがつていた　西瓜畑に
今日は
何にもない
未知の人に盗まれたのだ

原つぱと空ばかりがあつた
白い雲が往つたり来たりして
西瓜を探している
一人の若い女がやつてきた
女は西瓜のことなど知りはしない
充実した腰をふりながら
のぼせた顔をして
すたすたと　未知の世界へ行つた

やがて女も消えた
原つぱがあつて　その上に空があつた

遠い友よ

風のなか
まひるの山の峠で出あつた
あなたよ

こかげの岩かげで
二人はしばらく　蝉の声に
耳をかたむけ
遠い雲をみていたつけ

あなたはのぼり道　私は下り
あのひとときの出会い
みじかい対話
あかるい　イメージ

風のなか「さようなら」
桔梗が一本ゆれていたつけ
あなたは　やがて

白い夏帽子に真昼の陽をうけ
蝶のように
すすきのかげに消えていった

石の思想

広い河原にいって
石の間にもぐり込むのがすきだ
石たち自らの追憶　その二十億年は
昨日のようだ
二十億年前の　青い蝶が
ほら　石原をよこぎってゆくのが見える

石たちの上を　時間がゆっくりゆっくり
あるいている
ほら　一匹のバッタが
しだいに　巨視像となって
永劫の空に映し出される
光り　かげり　また光る　雲たち
廻転しながらいつか無の中に消える地球
ぼくも　石たちも　バッタも
やがて　消滅するために
今は
ちからいっぱい光っている

青空文庫情報

底本：「近代浪漫派文庫　29　大木惇夫　蔵原伸二郎」新学社
　2005（平成17）年10月12日第1刷発行
初出：岩魚「詩苑」
　1963（昭和38）年
　落日「陽炎」
　1963（昭和38）年6月号
　西瓜畑「詩学」
　1955（昭和30）年1月号
　遠い友よ「中学生のための続・現代詩鑑賞」宝文館
　1955（昭和30）年9月10日第1刷発行
※底本は新字新仮名づかいです。なお拗音、促音が並につくられているのは、底本通りです。
入力：kompass
校正：大久保ゆう
2016年1月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

岩魚

蔵原伸二郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/